

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07190

研究課題名(和文)ドミニコ会文献群の本文整定を通じた再評価と、それを用いた日本語音韻史研究

研究課題名(英文)A Reevaluation by textual critics of documents by Dominican Orders and studies on phonological history of Japanese using these documents.

研究代表者

岩澤 克 (IWASAWA, Katsumi)

上智大学・文学研究科・研究員

研究者番号：70781087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：16・17世紀に外国人宣教師が刊行したキリシタン資料の内、ドミニコ会の刊行した文献は、精密さ・規範の一貫性に於いてイエズス会の刊行した文献に劣ると評価されている。しかし、実際はその総体を総合的に把握する研究に乏しく、評価に疑問が残る。そこでドミニコ会文献の資料性の検討とその有効性の検証を行った。欧州の図書館・文書館に所蔵される資料を確認して本文を整定し、電子データ化した。それを用いた研究の成果を、国際会議10th International Conference of Missionary Linguisticsなどでの口頭発表や、『日本近代語研究6』での論文公表という形で公開した。

研究成果の概要(英文)：Among documents published by foreign missionaries in the 16th and 17th centuries, Documents published by Dominican Order are evaluated to be inferior to Documents published by the Jesuits in accuracy and strict norms. However, there is little study to understand the whole, and this evaluation is not deterministic. Therefore, this study examined the effectiveness of documents by Dominicans. I surveyed documents held in libraries and archives in Europe, revised texts and converted these into electronic data. Results of studies using these data were orally announced at 10th International Conference of Missionary Linguistics, and published as a thesis in "Studies on Modern Japanese 6".

研究分野：日本語音韻史研究 キリシタン資料研究

キーワード：日本語音韻史 キリシタン資料 ドミニコ会

### 1. 研究開始当初の背景

中世末期から近世初期にキリスト教宣教師の手によって成立したキリシタン資料は、日本語資料として、従来の日本側の文献とは異なる視点から観察・記録・作成された文献群で、特にローマ字表記のなされた資料が日本語の音韻史に果たした役割は極めて大きい。しかし、従来の研究は、イエズス会の資料に著しく偏重しており、資料の量の面からの制約だけでなく、同一会派の文献のみを資料とするために生ずる視点・見解の限定は、日本語史資料としての問題である。一方で、他会派（ドミニコ会、アウグスチノ会など）の文献は、その精密さ・規範の一貫性に於いてイエズス会資料のものに劣るといった評価が定着しているが、それらを資料として扱うための本文整定作業などは、殆ど成されて来なかった。

### 2. 研究の目的

本研究の主たる研究目標は以下の二点である。

1) ドミニコ会文献群の資料性の検討のため、自筆写本群・欧州内刊行物群の全ての表記を計量的に対比し、ドミニコ会による刊行物群の誤綴・誤記などの合理的な取り扱い規準を設定して、本文整定の方針を定める。

2) 前項に基づき、ドミニコ会文献群の本文整定を行なった上で、既に精細な研究が積み重ねられて来たイエズス会資料とは異なる観念の資料を活用することで、中世末期から近世初期の日本語音韻史研究に新しい視点を与え、未解決のまま残されてきた問題を解決する糸口とする。併せて、ドミニコ会資料全体の日本語史資料としての評価を確立する。

### 3. 研究の方法

1) まず、全てのドミニコ会刊行文献の主要諸本の画像を入手して、諸本を対校した上で、各文献の電子テキストとしての全データ化を行う。

2) 当該データから、音節表記の変異（バリエーション）を全て抽出し、文献間・各文献内の分布、音韻環境ごとの整理などを行っていく。その際、ドミニコ会文献のうち、コリヤード自筆本類は、印刷過程で混入した誤植・誤記類を摘発する上での最重要資料であるため、特に自筆本と刊本との対比を重視する。

3) 前項のデータを（既に研究の進んでいる）イエズス会資料と計量的に比較対照していく。

4) これらのデータに基づき、ドミニコ会資料

に存在する誤表記などの処置を定める取り扱い規準を設定し、それに基づいて、ドミニコ会文献全本文の整定を行う。

5) このようにして整定されたドミニコ会資料本文に基づいて、日本語音韻史上において未解決とされる諸事象について考究する。具体的には、アクセント・母音体系などについての考察を、それぞれ口頭発表と論文として公表していく。

### 4. 研究成果

欧州の図書館・文書館などに所蔵されるドミニコ会が書き記した写本や公刊された刊本を確認し、種々の文献を対照することでドミニコ会文献の本文を復元し、その校訂によって得られた本文の電子データ化を行った。その電子データを活用することで、ドミニコ会文献の資料としての成立に関する研究や、ドミニコ会文献独自の記述に目を向けた日本語音韻史に関する研究を行い、ドミニコ会資料の資料としての有用性を提示した。

#### 1) コリヤード『羅西日辞書』の成立過程

コリヤード『羅西日辞書』は1632年にローマで刊行されたラテン語・スペイン語・日本語の対訳辞書であり、ドミニコ会士であるDiego Colladoによって編纂されたものである。この『羅西日辞書』は本篇・補遺・続篇の3部で構成されるが、本篇・補遺と続篇とで、その成立過程が異なる。本篇・補遺はColladoが自ら編纂した『西日辞書』を稿本としており、その中に記される記述を引用・編纂することで成立したものである。典拠となった『西日辞書』は先に刊行されたドミニコ会の文献などに現れる日本語を採集し、スペイン語・日本語の順で並べるものである。『羅西日辞書』本篇・補遺は『西日辞書』の記述に更にラテン語訳を加え、そのラテン語のアルファベット順に配列し直したものである。『西日辞書』に見られる記述のほとんどが収録されているが、『西日辞書』の最後部に記される語が補遺に集中することが確認され、『西日辞書』の編纂と『羅西日辞書』本篇・補遺の編纂が同時進行に近い形で進められていた可能性が想定される。

一方、続篇は本篇・補遺と大きく異なり、当時のヨーロッパで主として用いられたラテン語辞書である『Calépinus』を元に成立したと考えられる。同時代の日本で『羅西日辞書』続篇と同様に、『Calépinus』を典拠として編纂された『羅葡日辞書』というものが存在しており、これはイエズス会によって刊行された。従来の研究では、同様の成立過程を辿った『羅葡日辞書』を参考にして『羅西日辞書』続篇が成立したという見方がされることもあったが、序文におけるラテン語の記述や、辞書内の項目の不一致などから、続篇が『羅葡日辞書』を参考としておらず、

『Calepinus』を直接参照して成立したものである可能性について指摘した。また、その『Calepinus』は多くの刊本が存在しており、その系統が幾つも存在しているが、続篇は、項目のアルファベット順が乱れている箇所的位置や、どの語を見出し語として採用しているのかという観点から、16世紀後半に刊行されたバーゼル版の系統に最も近いという可能性を指摘した。

## 2) キリシタン資料に見られる能楽用語

中世末期から近世初期にかけて日本を訪れた外国人宣教師達は、日本の文化にも目を向け、芸能に関する言葉なども多く記録している。イエズス会宣教師が編纂した『羅葡日辞書』や『日葡辞書』には「能」や「狂言」といった語が見られ、それらの日本語にポルトガル語やラテン語の対訳を与えている。先に成立した『羅葡日辞書』は悲劇とされることが多い「能楽」という語に「悲劇」を意味する“Tragicus,i”や“tragedia”という訳語だけではなく、「喜劇」を意味する“comoedus,i”や“comedias”という訳語を与える例が見られる。また、喜劇と呼べる「狂言」に「悲劇」を意味する“trageitos”を当てている例も見られ、「能」と「狂言」の区別が見られない。後に成立した『日葡辞書』では両者を厳密に区別し、「能」には「劇」や「悲劇」を意味する“auto”や“tragedia”を当て、「狂言」には「喜劇」を意味する“comedia”を当てる。『日葡辞書』には『羅西日辞書』には見られない「舞う」・「踊る」の区別や、「神」・「仏」の区別が確認され、イエズス会宣教師達の日本文化に対する理解が深まっていることを窺わせる。

## 3) ドミニコ会文献のアクセント注記と母音単独音節“o”

Diego Collado が記した文献に見られる日本語には、他の文献には見られないアクセント注記が多く見られる。このアクセント注記は当時の日本語アクセントを反映したものと考えるべく、それがどのような役割で付与されたものであるかについては解明されないままだった。Diego Collado の文献に見られるアクセント注記は、単純語の場合は後から2番目の音節にアクセント記号が打たれる penultimo 型であるものが非常に多い。また、語が複合・派生する場合、1つの語に複数のアクセント記号が打たれるが、そのアクセント記号を打たれる位置は複合・派生の元となっている語において、後から2番目の音節の位置にアクセントが打たれる。このことから、Diego Collado は日本語の音声を示すためではなく、日本語の語構成を示すためにアクセント記号を用いたものである可能性を指摘した。

そして、Diego Collado が記した文献には、「ヲ」に対して「o」のみを当てる独自の表記が見られる。当時の「ヲ」は[vɔ]と発音さ

れるものであったと考えられ、他のキリシタン資料では「vo・uo」が用いられ、Diego Collado も原則として「vo・uo」の表記を用いている。「o」のみの評価が現れるのは、撥音に助詞「を」が接続する場合のみである。[vɔ]から[ol]への音価の変化は近世期に生じたとされるが、その明確な時期は明らかになっていない。しかし、先に触れたアクセント注記の役割から「o」のみの表記を見直すと、それが[vɔ]から[ol]への変化を示すものである可能性に結び付く。

## 4) マニラ版『ロザリオの経』の成立過程

Juan de los Angeles が1622年にマニラで刊行した『ロザリオの経』は、当時の欧州で広く流布していたと考えられる信仰によって成立した修徳書である。『ロザリオの経』に見られる奇跡譚を記した章段の末尾には、引用元と考えられる著者の名が記されており、その注記から欧州で流布する奇跡譚をまとめたものであることが裏付けられる。この注記に挙げられる著者名は多岐に渡っている。各著者が記した文献の中に、『ロザリオの経』の内容や形式と一致している箇所が見られ、『ロザリオの経』は、それら多岐に渡る文献を典拠とする可能性が想定される。

『ロザリオの経』の注記に最も多く名が挙げられる Ioan Sagastizabal の著作『Exortacion a la santa devocion del Rosario de la Madre de Dios』は、その中でも特に重要と考えられる。この Ioan Sagastizabal の著作に見られる記述は、『ロザリオの経』注記において、Ioan Sagastizabal の名が見えない章段においても一致が確認され、『ロザリオの経』巻4のほぼ全ての章段が『Exortacion a la santa devocion del Rosario de la Madre de Dios』を引用していると考えられる。このことから、『ロザリオの経』巻4の典拠は Sagastizabal の著作、もしくはそれを継承した文献のみであり、『ロザリオの経』は多様な著者名を挙げながらも、実際には既に欧州において編纂されていた文献を孫引きする形で成立したものであったという可能性を指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

岩澤 克  
「ドミニコ会文献のアクセント注記と母音単独音節“o”の存在について」

『日本近代語研究 6』、査読有、  
2017.06、p.271-290

岩澤 克  
「コリヤード『羅西日辞書』続篇の成立過程  
とその出典について」  
『上智大学国文学論集 50』、査読有、  
2017.01、p.160-146

〔学会発表〕(計 4 件)

岩澤 克  
「The source of "Rosario Kiroku" "Rozario  
no Kyo" and its translation」  
10th International Conference of  
Missionary Linguistics、  
2018.03

岩澤 克  
「マニラ版『ロザリオの経』の位置について」  
第7回キリシタン語学研究会、  
2017.09

岩澤 克  
「Japanese Theatrical Terms in Missionary  
Documents」  
国際シンポジウムキリシタン時代の宣教に  
伴う演劇の言語 International Symposium  
on Languages of Theatre in the Christian  
Mission in Japan/ Simpósio internacional:  
As Línguas no "Teatro da Missão" no Japão、  
2017.03.

岩澤 克  
「コリヤード『羅西日辞書』の成立過程とそ  
の記述について」  
平成 28 年度上智大学国文学会夏季大会、  
2016.07

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
岩澤 克 (IWASAWA, Katsumi)  
上智大学・文学研究科・特別研究員  
研究者番号：70781087